

千葉市 オーラルヒストリー

～記憶で辿る千葉市の輝き～

【寒川神社氏子青年会 編】



千葉市

寒川の御浜下り

800年の歴史とその再興

——鈴木さんと氏子青年会との関わりについて教えてください。

寒川神社氏子青年会 鈴木 年樹氏



鈴木 年樹氏

中世にまで遡る由緒ある起源を持ちながら、昭和30年代の埋め立てによって途絶えてしまつた寒川神社の神事・御浜下り。その復活までの道のりを、寒川神社氏子青年会の鈴木年樹さんに伺いました。

昔は各町会の青年会が寒川神社に集まつていろいろなお手伝いをしていたんですけど、高齢化で各町会から青年会がなくなりつあつた頃、先生（先代の寒川神社宮司）が私の家に来て、「青年会に入つてほしい」と言われました。大学卒業後すぐのことですから丸30年経ちましたね。

声をかけられたのは、もともと寒川神社の祭りが好きで、親子そろつて毎年参加していたからでしょう。寒川では祭りのことを「まち」というんですけど、夏が近づいてくると、父親が「去年の“まち”はさあ……」とか「昔、『御浜』でよお……」なんて話し始めるんですよ。そういう風に育ちましたから、子どもながらに祭りの真似ごとをして遊んだりしていました。祭りが終わるとガツクリ。わが家のカレンダーは祭りの日を中心に回っていますね。

寒川神社は、家から歩いて5分ぐらいのところで、夏にお化け屋敷をやつたりして、子どもの遊び場としてもちょうどいい場所だつたんです。それが区画整理で縮小されて、参道は奥行きがなくなり、以前の鎮守の杜みたいな風情は見る影もありません。

自分以外にも青年会を長く続いている人たちがいますけど、皆、祭りに取り憑かれたような気持ちと、勢いの衰えてくる神社を「何とかして守りたい」という使命感とに駆り立てられているような感じです。

——氏子青年会の構成、活動について教えてください。

の休みを取つて集まつてきますね。



現在の寒川神社。創建は不詳。一説には延喜式内社の寒川神社と言わ
れ、古く神明神社または伊勢明神と呼ばれた寒川地区の総鎮守

現在、名簿上で42人。本人は氏子町会の外に住んで

いるけど、寒川のことが気になつて仕方なくて手伝いに來ているという人が半分

近く。実家が氏子町会の中にあるという人もいますね。

年齢は、20代はいなくて、30代、40代、50代、60代が

それぞれ7～10人ぐらい。

青年会なのですが、一番若い人でも30代です。

青年会の活動は、祭りだけではなく年間を通じて神社に奉仕すること。各町会の代表である町会長と、氏子総代が神社の役員として決め事を定めたり経営したりしています。私たち青年会は、作業で奉仕して神社を盛り立てていくという感じですね。

例えば、初詣での参拝客の接待とか、節分祭や七五三の手伝いとか。普段はスーツを着ている人が、作業着のつなぎを着てしめ縄を作つたり、泥だらけになつてテントを片付けたり。なかなか全員がそろうことはないのですが、それでも8月の例祭には仕事

御浜下りは、毎年8月20日の例祭の日に神輿を海の中に担ぎ入れる神事です。

寒川一帯は漁師町で、この辺りで信仰されている妙見様みょうけんが海に入ることで、漁に恵まれると伝えられています。盗まれて田んぼに埋められていた妙見菩薩様を海の水で洗ったという伝承もあって、これが御浜下りで3回繰り返して海と浜を出たり入つたりすることや、搖すつては上に差し上げるような神輿の動かし方と関係があるのかもしれません。

神輿は朝早くに宮出しされて、威勢よく市中を練り歩きます。夕方になると浜に出て、辺りが薄暗くなる頃、神輿が海に入るという流れです。その後、再び神輿を担いで神社に戻り、宮入りするところまで祭りは続きます。さらに、海から上がってベタベタした体と、中まで砂浜の砂だらけになつた足袋のまま後片づけしなきやなりません。でも、それからようやく社務所に上がって、豆腐をつまみに一杯やりながら、「いい『まち』だったね」って、皆で言い合う時が最高にうれしいです。

写真じゃ伝わらないけど、御浜下りには何ともいえない神々しさがあります。浜辺の向こうに富士山が見えて、いい風が吹いてね。だんだん暗くなつていく中、神輿が海に入つていく。そこに

——「**御浜下り**」とは、どのような神事ですか。

神様がいるような感じがして鳥肌が立つんです。そんな一瞬を感じたくて、毎年やりたくなってしまうんじゃないかなと思いますね。

——昔の様子について、どのようにお聞きになっていますか。

御浜下りは中世の絵巻物にも描かれている由緒ある風物です。以前は、出洲海岸にある大鳥居をくぐって神輿を海に担ぎ入れていたそうなのですが、その海岸が昭和30年代に埋め立てられ、海に入ることができなくなってしまいました。青年会でも、役員たちは昔の御浜下りを知っていますが、私くらいの年齢だと見たことがなくて、父親なんかが話す逸話を聞くばかりでした。小さい

頃からくり返し聞かされたのは、例えばこんな話です。
寒川神社が戦後に新調した神輿は、あんまり大きいので「お化け神輿」と呼ばれていました。祭りの日、旧道を「やつしややつしゃ」と担いで運んでいたのですが、Uターンしようと向きを変えた時、両脇の家にぶつかってしまつたそうです。担ぐ棒が長すぎました。突つかかってしまつて、どうしても向きが変えられない。じゃあどうしたか。棒を詰めたかというと、ところがどっこい。棒のこちら側の家にあつた戸袋と、反対側のお風呂屋さんの塀を外して、やつと向きを変えたんだとか。神輿の方を切るという発想はないんですね（笑）。

ほかにも、今だつたら大事件だよねとか、それ警察沙汰でしょ、みたいな話もあつたりして。それでも、祭りだからっていうんで、当時はそれで収まっちゃつたんだよとかいう話を、もうお決まりのように毎晩聞かされるわけですよ。夕飯時には、笑いが絶えなかつたですね。

そうするとやっぱり、この地域にそういう元気を取り戻せないかとか、御浜下りを見てみたって、子どもながらに思つていました。

——御浜下りは、平成12年に氏子青年会の皆さんにより、約40年ぶりに復活したと伺っています。そのいきさつを教えてください。



千葉ポートタワーの砂浜から海に入っていく（2016年）



夕日に照らされる御浜下りの海辺は神々しい雰囲気に満ちている（2015年）

海岸が埋め立てられて浜がなくなると、御浜下りはできなく

なつて、代わりに出洲港から台船（荷物の運搬などに使われる平らな浮き船）を出して、そこに神輿や太鼓を乗せてお囃子をする

という神事をしていました。台船をタグボート（引き船）で引っ張つて、千葉港を一周して帰つてくるんです。だけど、工場地帯を船で回つてゐるだけだから、住人はそんなことをやつてゐるとは気付かない。神社の役員ぐらいしか知らないような神事をずっと続けていました。なぜかといつたら、神社としては、とにかく神様を海に入れなきやならないからなんです。

この頃は、寒川から御浜下りの「御浜」という言葉がすっかり消えてしまつていきました。自分としては、声をかけてもらつた時から「もう1回、『御浜』をやりたい」と先生に話して、その復活を目的に青年会に入つたようでしたから、集まる機会があるたびに“御浜”的話をするようにしてました。そうすると、「そういえば、うちの爺さんから聞いたんだけど」「うちの父親がこんなこと言つてたよ」と、“御浜”的話が断片的だけど出てくるようになつて。そのうちに氣分が盛り上がつてきて、だんだんみんなも実際に見たくなつたんじゃないですかね。実現した時は、寒川の至る所で“御浜”という言葉が復活していました。

——御浜下り復活までのご苦労などがあれば伺えますか。

そもそも先生は大らかで人柄が良くて、ほかの神社の氏子たちに羨ましがられるくらいなんです。復活させるのに、そういう意

味での難しさがなかつたのには救われました。神社の役員たちも賛同してくれましたしね。先生は、先祖代々、千年近く妙見様をお守りしてきた一族の末裔なんですよ。

千葉ポートパークの以前はカミソリ護岸だつたところに人工の砂浜ができる、あそこならできるかもという期待が高まりました。一番気を遣つたのは、再開する際、少しずつ慣らしていくようにしたことです。実は近年、寒川から祭りに参加する人が減つていて、神輿同好会から担ぎ手を募つていたんですね。昔みたいに、神輿を担ぎ慣れていて、気心も知れている仲間ばかりというわけではありませんから、神輿を水中に沈めてしまうとか、思いがけないことが起こらないように、慎重に進めました。

——復活を実現された時は、うれしかつたでしょうね。

初めて神輿が海に入つた時、昔の御浜下りを知つてゐる役員は皆、泣いていました。涙を流して本当に泣いていましたね。担ぎ手は半纏はんてんを着てますが、役員たちは、時代劇で殿様が身に着けているような袴かみしもなんですよ。それで神輿のお供をして回るんですが、感極まつて、その袴のまま海に入つちやつてしました。

海から上がつて、神輿を担いで神社に戻るんですが、神社に神輿を納める時になつてまた自然と涙が流れてきて、「神様が近くにいるんじやないか」と、口々に言つてました。不思議な充足感がありましたね。

——平成21（2009）年に、千葉市地域無形文化財に認定されたときのお気持ちを教えてください。

自分たちの楽しみのために始めたことでしたが、文化財に認定されたことで、「御浜下りは千葉市の財産」だと改めて気付かれました。お墨付きをもらつたみたいでうれしかつたです。

確かにこれは、千葉市にとって大事な行事なんですよ。令和4（2022）年放映のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』にも出てくる房総の武将・千葉常胤^{つなね}は、鎌倉幕府を開いた源頼朝から父と呼ばれて慕われたという人物です。1180年のこと、常胤は、戦に敗れて船で逃げてきた源頼朝を助けて信頼されました。常胤は千葉一族の中興の祖とされ

ており、その孫・成胤^{なりたね}が出洲港で敵の大将を生け捕りにしたことを見念して、御浜下りが始まられたと言われています。

その後800年間、たとえ貧

しく寂れようとも、寒川の住民はこの行事を頑なに守り続けてきたんですね。でも、その起源を考えると、御浜下りは、千葉家と千葉町というブランドの誕生に大きく貢献した、



威勢よく寒川の街中を練り歩く神輿（2016年）

千葉市民みんなの祝い事と言つていいのではないでしようか。

千葉市の文化財ということなら、もつと堂々と胸を張つて、あちこちに出向いて「大事なものだから守つていこうよ」と呼びかけてもいいのだと、後押ししてもらつていてるような気がしています。

——新型コロナウイルス感染拡大防止のため活動が制限されると思いますが、今後の抱負についてお聞かせください。

今年は結局、神輿は出さずに各町内を回り、形だけ海に入つて神事を行いました。青年会も活動できませんが、これをいい機会と捉えて、次に向けての準備に充てようと、新しいことに時間を割いています。

具体的には、JFEスチール株式会社さんが地域の活性化にとても力を入れていて、千葉大学の学生と産官学連携を試みているんですね。寒川の御浜下りも産官学連携できないかと相談したら、すぐに市長を紹介してくれて。現在、千葉市を含めた連携に向けて動き出しています。

直近では、千葉中央駅の前の新宿公園にお仮屋を建てて神輿を置き、露店を出したりするイベントを企画中です。今は駅の西周辺にマンションがたくさん建っていますが、あの辺りは実は、寒川神社の氏子地域なんですよ。担ぎ手が着る半纏も販売する予定です。半纏を持っていれば担ぎ手として参加してもらえます。こういう取り組みによつて、サポーターのような感覚で、より多

くの人に参加したり支援したりしてもらえるようになればと思っています。

こうした活動を円滑に進めるために、宗教団体の下部組織に当たる青年会にはそれなりの制約があるということで、そこから切り離した協議会のような非営利組織を立ち上げました。市民の啓発や協賛金の募集、それから小学校に出前授業に行くなど、子どもたちに参加してもらえるような活動をしていきます。

——復活して20年が過ぎ、改めて感じる活動への想い、御浜下りの魅力とは何でしょうか。

御浜下りを復活させたかったのは、「誇りを取り戻したい」からでした。寒川に生まれた人って、それをコンプレックスにしながら暮らしているんじやないかと思うんですよ。自分はそうでした。仲のいい同級生は子どもの頃、「線路の向こう側には行くな」と親に言われてたらしいです。向こうは漁師町で貧しくて、火事やら喧嘩やらが絶えないからと。自分でも、川向こうのきれいな家並みに比べて、橋のこっち側はスクランプ場や廃屋ばかりだなと感じていました。

今でも、うなぎの寝床みたいな長屋が多いし、区画が狭いから、そこに新しく家を建て直すこともできないっていうので、寒川の外に出て家を建てる人が多い。だから空き地だらけです。

こんな寒川でも、祭りの話を聞くと、威勢のいい神輿の担ぎつ

ぶりとか、実はすごい由緒があるんだなとか、昔の生き生きした様子が目に浮かぶようで、何だか誇らしく思えました。だから、誇りを取り戻すためには、その輝かしい御浜下りを皆でもう一度やることだ、って思つたんです。

そうすれば、千葉に住んでいる人も前よりもうちよつとだけ、「千葉はいい街だよ」って言いたくなるんじやないかなと。そのためにも活動を続けていきたいと思います。

復活して終わりではなくて、毎年続けてきた寒川の住民は、底力があつて本当にすごいなと思います。『御浜』が未来永劫続きますように。

千葉市オーラルヒストリー

寒川神社氏子青年会 編

発行／千葉市中央図書館

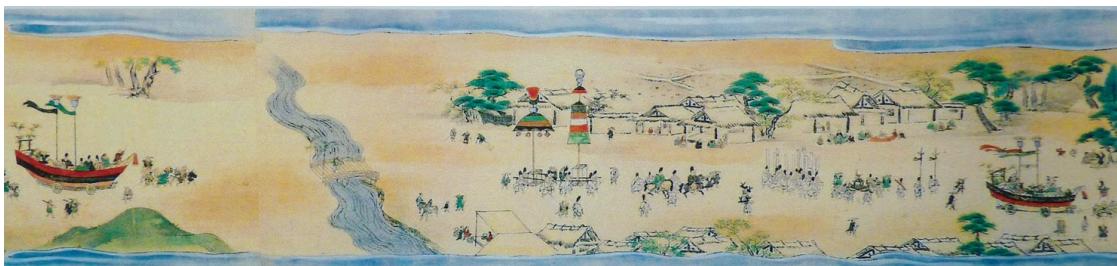
発行日／令和4年3月31日

取材日／令和3年11月16日

資料提供／寒川神社氏子青年会、千葉市立郷土博物館、

相馬妙見歓喜寺

(表紙：千葉神社、三代王神社神楽連、千葉市を美しくする会、検見川神社神樂囃子連、登戸神樂囃子連、加曽利貝塚ガイドの会)



御浜下りの由来は中世に遡ると伝えられており、『千葉妙見大縁起絵巻』や『千学集抜粹』などにも千葉妙見（現千葉神社）の祭礼の中で「御浜下り」が執り行われていたことが記されている。当時の祭礼は千葉町と寒川村の一体的な祭りで、「千葉舟」と「結城舟（別名寒川舟）」という舟形の山車を曳き出すなど、大規模に行われていた。この祭りは江戸時代の記録にも度々登場し、二基の「大舟」の上では神楽が奉納されたといわれる。写真は江戸時代の妙見祭を描いたもので、左の舟が結城舟、右の舟が千葉舟。「下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻」より（福島県・相馬妙見歓喜寺蔵・非公開）



「大舟の飾り幕」。結城舟の側面に飾られていた幕で、嘉永3(1850)年に新調されたもの。長さ約15m、幅78～79cmあり、船首に当たる部分には、千葉氏の家紋「月星」と「九曜紋」が飾られている。この幕の裏には寄進に携わった氏子の名と、この幕を寄進するためには氏子が「1日1銭を蓄えたと」いう由緒などが記されており、当時の氏子の祭礼にかける思い入れを伺うことができるという（写真／千葉市立郷土博物館提供）



あまりの大きさに「お化け神輿」と言わされた初代神輿に代わり新調された、先代の神輿（千葉市立郷土博物館蔵）



海が埋め立てられる前に行われていた御浜下りの様子。海の中に鳥居が建っている



千葉市蘇我スポーツ公園で開催される秋の恒例行事、JFE ちばまつりに参加（2016年10月23日）